

2006-12-15

Outline for the literacy education at the University of Washington Libraries

Yokota-Carter, Keiko

<https://dx.doi.org/10.7302/7866>

<https://hdl.handle.net/2027.42/177132>

<http://creativecommons.org/licenses/by-nc-nd/4.0/>

ワシントン大学図書館における情報リテラシー教育のアウトライン

Keiko Yokota-Carter

(けいこ よこた かーたー)

ワシントン大学図書館

紹介ありがとうございます。アメリカ西海岸の北西部、シアトルにありますワシントン大学から参りました。シアトルはスターバックスコーヒーやマリナーズ、イチロー選手の活躍やマイクロソフトで日本でもかなり知られるようになりましたが、この機会にぜひともワシントン大学のことを皆様に知っていただきたいと思っております。

今日は15分という短い時間ですのでアウトラインだけですが、個々の細かいリテラシーエデュケーションは、それぞれの機関によって違ってくると思いますので、ワシントン大学におけるインフォメーション・リテラシー教育の大きな枠組みについてお話ししたいと思います。

アメリカの教育の大きな理念は、民主主義社会を支え、発展させる自立した市民を育てることです。9月11日の事件が起こって以来、大学では世界市民を育てることが大きな使命となって参りました。私たちの大学では、アメリカだけではなく世界のことを理解し、そして世界の平和を発展していく市民を育てよう。言葉を聞くと空々しく聞こえるかもしれませんが、私たちは本当にナイン・イレブンのことを真剣に受け止めています。

これまでのリテラシー教育でも何度か説明があったのですが、アメリカにおけるリテラシー教育も、生涯教育として自分を再教育できる人間を育てるということを目標にしています。今の社会は、新しい技術や新しい情報がたくさん出てきますが、それを自分で学習し、また、自分を再教育して新しい社会に適応していく人間を育てることが大きな目標になっています。

ワシントン大学は、日本では明治維新が起こった少し前の1861年に創立されました。(図-Yokota-Carter-1) 私たち大学の使命は、知識の保存と発展・普及にあります。大学図書館におけるインフォメーション・リテラシーの教育も、この大学の理念に沿ったものです。

私たちの大学には教官が約3千人、そして職員を含めると2万3千人の者がおります。今年の統計は分かりませんが、去年の秋学期では約4万人の学生がいます。これはどれぐらいたくさんの人間かと申しますと、イチロー選手が活躍しています。

University of Washington

Founded in 1861

Missions:

the preservation, advancement, and dissemination of knowledge

- Instructional Faculty -- 3,360
- Faculty and Staff -- 23,462
- 2003 Autumn Student Enrollment: 42,757
(39,136 on Seattle campus)
Undergraduate: 30,921
Graduate and professional: 11,836
- Extension Enrollment 26,444

図-Yokota-Carter-1

University of Washington Libraries

Missions

The University of Washington Libraries enriches the quality of life and advances intellectual discovery by connecting people with knowledge.

5 million catalogued volumes an equal number in microform, several million items in other formats, and more than 50,000 serial titles
22 unit libraries

図-Yokota-Carter-2

フコ・フィールドが4万人入ります。セーフコ・フィールドに入っている4万人の学生の教育、それから3千名の教官の研究教育を支えるのが私たち大学図書館の使命です。

図書館の使命は「人々を知識によってつなげることにより、生活の質を高め知的発見を促進する」。私たちのインフォメーション・リテラシーの教育も、この理念に沿ったかたちで進めています。

約5百万タイトルの書籍、マイクロフィルム、ジャーナルとか多数ございまして、22のユニットの図書館があります。(図-Yokota-Carter-2) 例えば美術図書館、演劇を中心にするライブラリー、ビジネスライブラリー、法律大学院の図書館。私が勤めます東アジア図書館は、そのユニットの中の一つです。

日本語の図書に関しましては約13万点ございまして、これはシリアルとかマイ

クロフィルムとかを全部そろえたものです。こういう具体的なお話はあまりする必要はないのかもしれませんが、皆さん、日本の関係者の方の間には、アメリカの図書館の予算はどれぐらいでどんな規模かというのに興味のある方がいらっしゃるかもしれませんので、ご紹介させていただきます。

ワシントン大学の日本研究者は12名。大学院生が20名おります。アメリカの日本学研究では中規模です。ハーバードとかアイビースクールではもっとたくさんの研究者がいます。そして学部学生では日本関係のクラスを取る学生は1学期間で延べ人数約800人。そういった先生たちと学生の研究と教育をサポートするために、年間予算が約1千万円ございまして。その中で単行本は約千冊、ジャーナルを約250タイトル、CD-ROMを買ったりデータベースを買ったり、それだけでは足りませんので、外部の寄金に応募したりしています。

ワシントン大学図書館には五つの大きな目標があります。(図-Yokota-Carter-3) そのうちの一つがインフォメーション・リテラシーです。そして多様性。私たちは多様性のあるユーザーがいますので、そういった多様な利用者の多様なニーズにどういうサービスができるか。あるいは働いている人たちの多様性を高めるという意味で、多様性を一つの目標に挙げています。

もちろん図書館ですから優秀なコレクションを集める。そして any time any place. いつでもどこでも図書館を利用してもらえるようにしようということで、これはやは

UW Libraries Goals

- Diversity and organizational culture
- Excellence in collection/digital resources
- Any time, any place
- Capacity building
- Information literacy

©—Yokota-Carter—3

りリモートアクセスの問題が一番大きくなってきます。去年の利用者統計では、図書館に来る利用者はどんどん減る一方で、その反対に外部から図書館を利用する人たちがどんどん増えてきています。そういった人たちのためにも any time any place、いつでもどこでも使える図書館ということを中心に心掛けており、今、私たちは利用者サービスにかなりいろんなアイデアを絞り、工夫をしています。

こういった多様性とか優れたコレクションをそろえる、あるいはリモートサービスを行うことを支えるためにはお金が要ります。このために capacity building をしないといけないということです。実は、寄贈を集めたりするのは従来の司書の仕事ではなかったのですが、こういったサービスを提供するためには私たちも努力を始めました。「今日の利用者は明日の寄贈者」だと。(笑い) (拍手) でも、これは本当です。

私は6年前にワシントン大学で仕事を始めました。私は東アジア図書館なのですが、学部図書館のレファレンスの仕事もやらせてもらったのです。そこに大体19歳か20歳ぐらいの学生が来て、「何かあの子たちは態度が悪い」とか文句を言ったことがあるのです。その時にほかの図書館の人が、「この子たちは今は悪いかもしれないけど、3、4年するとマイクロソフトに勤めて、いや、3、4年もたたないでも、今引き抜かれてマイクロソフトに勤めて『あの時のライブラリアン、ありがとう』ということで寄贈するかもしれない。それは絶対に忘れるな」と言われたことが非常に心に残っています。

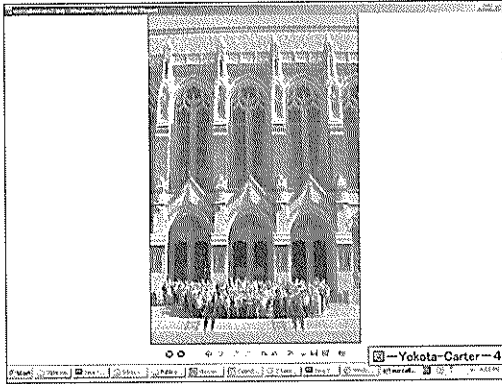
実は、それは本当に起こったことで、私が東アジア図書館に勤め始めましたところ、前任者が買ったCD-ROMがどんと私のオフィスに積んであったのですが、それを使えるコンピューターのプログラムがなかったのです。本当に宝の持ち腐れで、これは何とかしなくてははいけないと思いましたが、その当時の上司が別の考え方を持っている人だったので、「それは必要ない」ということで。そんなわけにはいかないの、私は何とかしなくてははいけないと思い、それでいろんなことを考えたのですが、最後はお祈りをしたのです。(笑い)

そうしますと、サンタクロースが私のオフィスに来まして、「何か図書館に寄贈をしたい」と言ってくれたのです。それは日本文学を専攻する大学院生でした。その時、彼はアマゾン・ドット・コムに勤めておりまして、「たくさん株でもうけたから。いつも図書館を使わせてもらって非常に感謝している。だから何か図書館のためにしたい」ということで、「それじゃ、Windows 2002をぜひ」とお願いしました。(笑い) 彼の寄贈が東アジア図書館のIT関係のインフォアストラクチャーが改善されるきっかけになりました。

彼はまた2年ほどたってから「何か要らないか」と言ってきてくれて、本当にあり

がたい学生なのです。(笑い) その時はカラーレーザープリンターがなかったのでお願いしました。(笑い) ですから、本当に今日の利用者は明日のドナーなのです。

私たちの図書館は、これはメインライブラリー、スザロー・ライブラリーの玄関の



所で3年前にみんなで撮った写真です。

(図-Yokota-Carter-4) 148名のライブラリアンがいます。アメリカでライブラリアンと申しますのは、ライブラリースクールに行って図書館学の修士号を取った人のことです。それから34名のプロフェッショナルスタッフ。アドミニストレーションとか、スタッフのためのいろんなプログラムを作るための人とか、ライブラリアンではないけれども、専門的業務をして

いる人が34名います。あとは、テクニカルな仕事をする人で、例えば注文を入力したり、本が来たときにそれを処理する人たちが208名働いております。

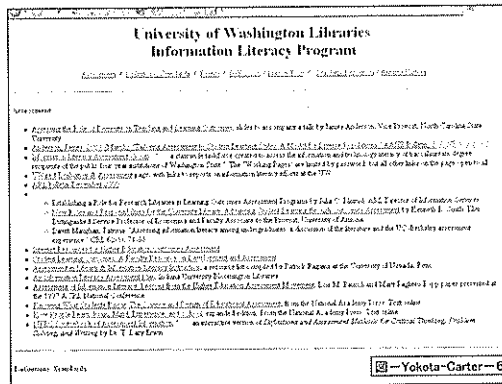
おかげをもちまして、私たちは今年、大変優秀なリサーチ・ライブラリーであると

いう賞をいただきました。これがインフォメーション・リテラシーにつながっていることですが、専門分野の知識を持つ“subject librarian”と言われる人たちのリストができています。

Subject Area	Name	Phone	Extension
Accounting	John Deaton	509-422-5155	422-5155
	John Deaton	509-422-5155	422-5155
	John Deaton	509-422-5155	422-5155
	John Deaton	509-422-5155	422-5155
	John Deaton	509-422-5155	422-5155
	John Deaton	509-422-5155	422-5155
	John Deaton	509-422-5155	422-5155
	John Deaton	509-422-5155	422-5155
	John Deaton	509-422-5155	422-5155
	John Deaton	509-422-5155	422-5155
Anthropology	John Deaton	509-422-5155	422-5155
	John Deaton	509-422-5155	422-5155
	John Deaton	509-422-5155	422-5155
	John Deaton	509-422-5155	422-5155
	John Deaton	509-422-5155	422-5155
	John Deaton	509-422-5155	422-5155
	John Deaton	509-422-5155	422-5155
	John Deaton	509-422-5155	422-5155
	John Deaton	509-422-5155	422-5155
	John Deaton	509-422-5155	422-5155
Biology	John Deaton	509-422-5155	422-5155
	John Deaton	509-422-5155	422-5155
	John Deaton	509-422-5155	422-5155
	John Deaton	509-422-5155	422-5155
	John Deaton	509-422-5155	422-5155
	John Deaton	509-422-5155	422-5155
	John Deaton	509-422-5155	422-5155
	John Deaton	509-422-5155	422-5155
	John Deaton	509-422-5155	422-5155
	John Deaton	509-422-5155	422-5155

今さっき148名のライブラリアンの中には、こういう研究分野のレファレンスをするライブラリアン、それからカタログを専門にするライブラリアンがいます。

(図-Yokota-Carter-5) 研究分野を専門とする人たちは、それぞれの分野で



いまして、雇用されるときは条件で専門分野、例えば社会学でしたら社会学の修士号を持っています。ですから少なくとも研究分野の修士号とライブラリースクールの修士号の二つの修士号を持っています。それから、その分野の博士号を持っている方もいらっしゃいます。

3年前にインフォメーション・リテラシー・ライブラリアンという専門の方が

雇われました。(図-Yokota-Carter-6) 彼女は総館長に直接報告する高い地位で雇われました。彼女を中心にして、ワシントン大学図書館でのインフォメーション・

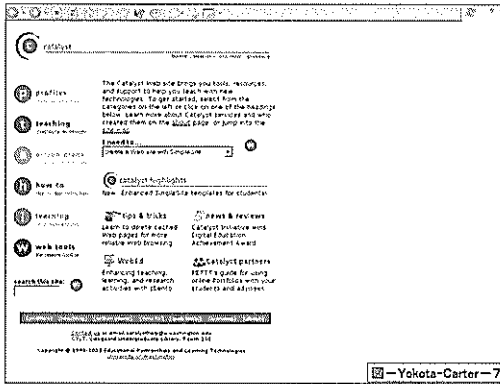


図-Yokota-Carter-7

リテラシーのいろんなサポートシステムを作っていくということ、このウェブサイトは、ライブラリアンが使うためのいろんな資料を集めてある所です。例えばいろんな教育理論とか、私たちがツールとして使えるようなもののホームページになっています。(図-Yokota-Carter-7)

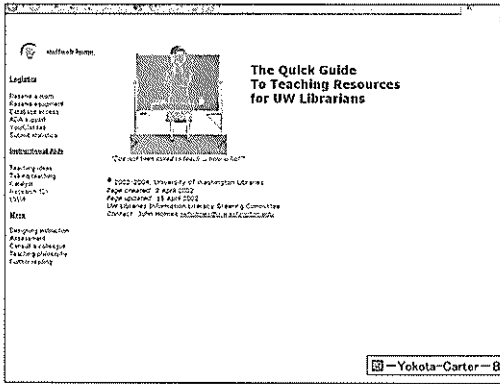


図-Yokota-Carter-8

そういった理論とか知識だけではなく、テクノロジーのサポートも要ります。例えば、ウェブサイトを作りたいけども何か分からないという人もまだいますので、テクノロジーのサポートをライブラリアンに提供するために、こういったオフィスがあります。実は、私もこの会議に来る前に時間がなくてなかなか準備が滞ったのですが、このオフィスのことを思い出しまして駆け込んで手伝ってもらいました。

それから、いろんなティーチングのリソースがあるというガイドを、インフォメーション・リテラシーを教える人のために作っています。

これはセルフチュートリアル(自習用)のページです。(図-Yokota-Carter-8) 今インフォメーション・リテラシーの教育は、学部の図書館を中心に行われています。先程も申しましたように、この学部の図書館に雇われているライブラリアンは、社会学とか人類学とかそれぞれの研究分野の専門家でもあるのですが、学部図書館の司書には、教育の経験のある人が意図的に雇われています。

これは“Research 101”という、学生が自分で、情報リテラシーの基礎が学べるページです。(図-Yokota-Carter-9) グループ学習もできる、自分1人でもできる。そして「みなさんの唯一のベストフレンドはライブラリアンです」ということです。

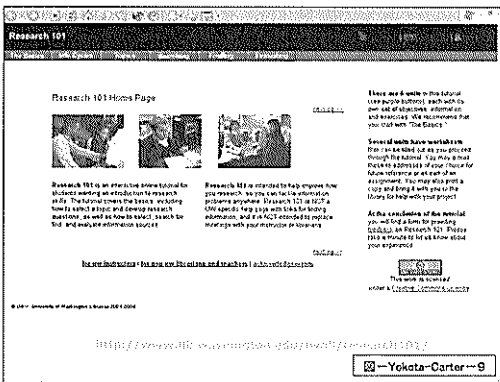
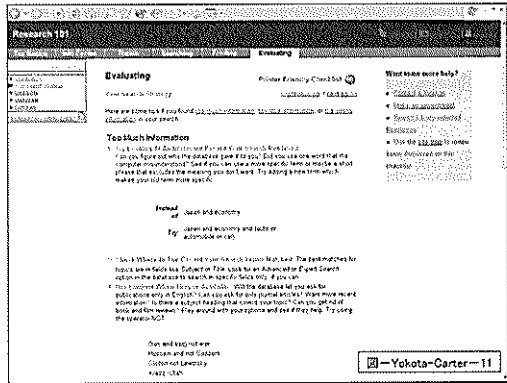
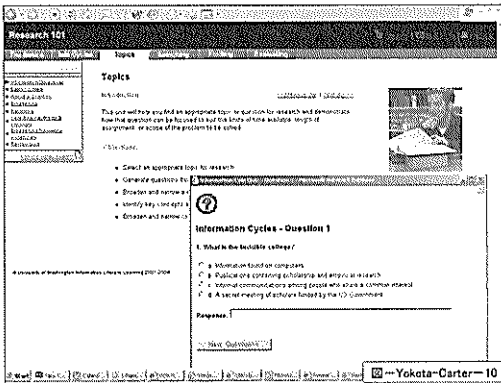


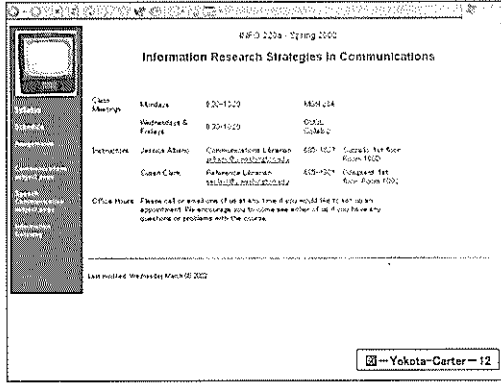
図-Yokota-Carter-9

これが自習用のページの一つです。(図-Yokota-Carter-10) 例えばトピックス選んで、ここのクイズの所に学生が一つずつ答えていくようになっていきます。情報を評価する。それから、検索をすると



きにこういうトピックを選ばいいというふうに。例えば日本と経済だけ使うのではなくて、もっと目的を絞って「日本の自動車産業」というように。

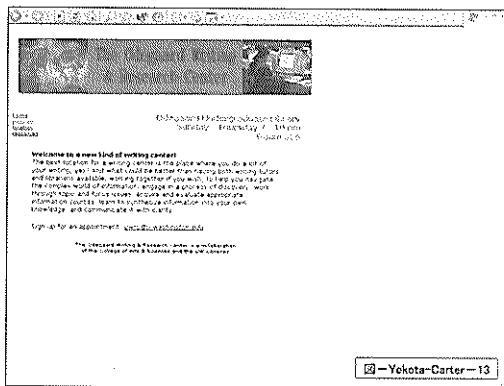
この例は、イランとかイラクについては膨大な量の情報が出ていますので、それではなくて戦争関係ではないイランのこと。あるいはフセインでもサダムではないフセイン。それから、クリントンでもルインスキーの話ではないクリントンの情報というふうに、こういったかたちで学生が身近にいつも聞いているような言葉を使って例を作ったりしています。(図-Yokota-Carter-11)



これはINFO220という5単位のクラスです。(図-Yokota-Carter-12)大学の正規のアカデミックのクラスでインフォメーション・リテラシーを教えています。これも情報技術だけを教えるということとはなかなかできません。必ず科目と連携させて、コミュニケーションの学生に向けたインフォメーションリサーチ、その文献にはどんなものがあるか、どうというふうに調べればいいのかを教えます。

このインストラクターは2人ともライブラリアンです。最初の人コミュニケーションのサブジェクトの専門である人。それから2人目は、このクラスはきっと大きかったので2人で教えていると思うのですが、ティーチングの専門家である人です。前の発表にもありましたように、こういったかたちでインフォメーション・リテラシーのクラスをできるだけアカデミックのクラスの中に入れていく。教授と協力して教えていく。あるいはこういったクラスでなくても、例えば世界の女性というクラスの所に、「このクラスの担当のライブラリアンはこの人です」と授業の予定と内容を示すシラバスにも書かれています。そうすると、そのクラスを取っている学生が質問があったときには、そのライブラリアンに相談に乗ってもらいます。

これは最近の試みですが、Writing Research Centerというものを図書館の中に組み入れました。(図-Yokota-Carter-13)今までアメリカの大学には、どこにで



も論文の書き方を指導するセンターがあるのですが、こういったWriting Research Centerを図書館の中に組み込むことによって図書館の利用を高める、図書館の重要性を高めていくということにしています。

それと資料を検索しただけではなくて、論文の資料の検索もそうですが、その前にどんなリサーチのトピックを選んでいいかわからない学生がけっこういます。

そういったこともライブラリアンがアドバイスできるという利点があります。それから参考文献の引用の仕方も、こういったリサーチセンターで教えます。

Writing Research Centerを学部の図書館に作りましたのは、もう一つは図書館側としましては、経済的あるいは政治的な意味があります。どこの大学でも事情は同じだと思いますが、特に私たちは州立大学ですので、ワシントン州の経済が、あまり良なくて州の予算がどんどん削られていきます。

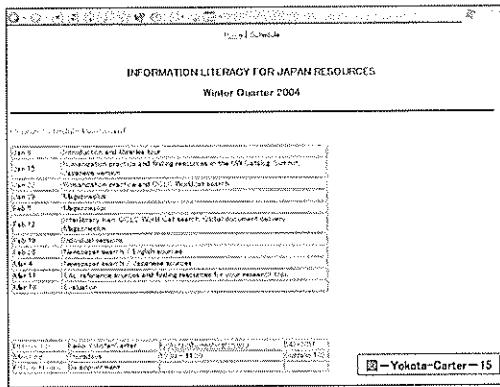
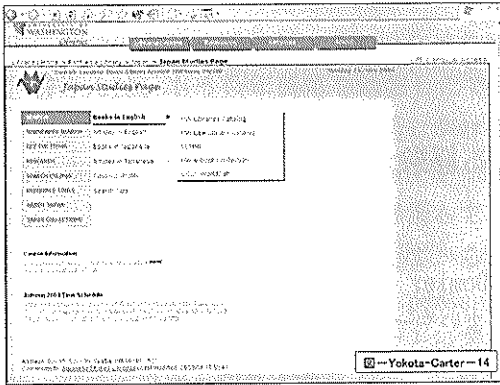
その中で、やはり大学の図書館も州議会に承認を受けないと増やしてもらえないですし、毎年のように削減されています。このように図書館の重要性を高めることによって、まず大学全体の総長なりに、大学教育にとって図書館がいかに重要な役目を果たしているかを訴えていく。どれだけの利用者があって、図書館がなければワシントン大学の教育はこれから成り立っていかないということを非常に強調することが必要です。

この学部図書館の館長は非常にビジネス感覚のある方で、ほかに大学の中に絵を飾って個展を開いたりとか、個展と関係ある人を招いてきてレクチャーをしたりとか、いろんなプログラムを展開して図書館に人を集める。そうした図書館の重要性を高めて、図書館の予算を獲得していくという努力をしています。

日本も同じだと思うのですが、特にアメリカはいつも自分がどんなに重要かを毎日のように主張していかないといけない所です。(笑) 私がどんなに賢くて、こういう人物を雇わないといかに損をするかということを書いていかないといけない社会なのです。それは本当に個人でもそうです。

私を雇わない限り、この図書館はつぶれてしまうぐらいのことを言って、図書館としてもそういうことを上に言って行って、また大学の総長も州議会に行って、文書を持って主張するわけです。それでやっと予算を獲得できるというシステムになっています。

アメリカは進んでいるとか、そういうふうに見えるかもしれませんが、アメリカでこういった新しい試みがどんどんなされているというのは、自転車操業という言葉がありますが、そこまでいかななくても、自分たちの存在意義を高め存在していくために、本当に日夜努力するという努力の賜物でもあります。



最後になりましたが、これは東アジア図書館で私が作っております日本学のページです。(図-Yokota-Carter-14) 実はこれも今年の夏、改善しました。できるだけ学生が自分で、リモートでどんなものがあるか、どういうふうを探しているかわからないときに少しでも役に立てばと思って、今まで5年間受けた学生の質問や、それから大学院生たちにどんなホームページにすれば使いやすいかというのを聞いて作ってみました。

日本語文献のリテラシー教育で申しますと、UWの中では一番遅れているというか、あまりされていなかったのです。実は、去年の秋に日本学についての英語のリソースと日本語のリソースを教えることとなって、2人で教えるクラスをしましたが、今回、来学期に初めて日本語だけの文献を私が教えることになりました。(図-Yokota-Carter-15) 日本語

ができる利用者には必要のないことも一つ一つ教えていかないといけないのです。日本語のタイトルをどの様にローマ字表記するかとか、日外のマガジンプラスの探し方とかです。

日本とアメリカ間ではインター・ライブラリー・ローンができるようになりました。それを学生自身に教えて、アメリカにはない資料は学生が日本のNACSISのデータベースをサーチする。そしてインター・ライブラリー・ローンに申請をするときに、「アメリカにはなかった。だけど日本の大学にはあるから取ってきてほしい」とメモの欄に書いて申請ができるように教えています。

もう一つは、アメリカの学生はリサーチアシスタントと申しまして、先生の研究補助のアルバイトをします。先生が、「こういうことに関しての文献を探してくれ」と言ってきたときに、やはり先生のリサーチはかなり高度でアメリカにないものが多いですから、日本の大学の図書もきちんと探して申請できるように、探してこれるように教えています。

これで最後です。ご質問があれば、またあとでお受けしたいと思います。ありがとうございました。(拍手)

デジタル時代の情報リテラシー教育：日本研究に関わる 学術図書館を中心として

平成16年度 日本研究情報専門家研修ワークショップ記録

Information Literacy Education in a Digital Age: With a Focus on
Academic Libraries Related to Japanese Studies

The Proceedings of a Workshop of the 2004 Training Program for
Japanese Information Specialists

国際文化会館図書室編集

国際交流基金発行

(社)日本図書館協会発売

JLA 200690

ISBN4-87540-077-2

C3000 ¥1500E



9784875400776

定価 本体1,500円 +税



1923000015005

Information Literacy Education in a Digital Age

Information Literacy Education in a Digital Age

平成16年度 日本研究情報専門家研修 研修生一覧

平成16年度日本研究情報専門家研修 研修生リスト

	氏名	国	所属機関
1	韓 徹正 HAN, Mi-jung	韓国	翰林大学校日本学研究所 Institute of Japanese Studies, Hallym University
2	周 志国 ZHOU, Zhiguo	中国	南開大学日本研究院 Institute of Japanese Studies, Nankai University
3	アーヤルソロート ティラワット ARAYARUNGROTE, Thirawat	タイ	独立行政法人国際交流基金 バンコク日本文化センター The Japan Foundation, Bangkok
4	ファン ケイ・ロン PHAM, Quy Long	ベトナム	日本研究センター Center for Japanese Studies
5	大塚 りり OTSUKA, Riri	オーストラリア	シドニー大学図書館イースト・アジアン図書館 East Asian Collection, University of Sydney Library
6	吉田 素子 YOSHIDA, Asako	カナダ	マニトバ大学 エリザベス・デフォー図書館 Elizabeth Dafoe Library, University of Manitoba
7	マルラ 俊江 MARRA, Toshie	米国	カリフォルニア大学ロサンゼルス校東亜図書館 University of California, Los Angeles Richard C. Rudolph East Asian Library
8	伊藤 倫子 ITO, Michiko	米国	カンサス大学図書館 東亜図書館 East Asian Library, University of Kansas Libraries
9	ヨコターカーター ケイコ YOKOTA-CARTER, Keiko	米国	ワシントン大学図書館 University of Washington Libraries East Asia Library
10	伊東 英一 ITO, Eiichi	米国	米国議会図書館 The Library of Congress
11	和泉 パトリシア民子 IZUMI, Patricia Tamiko	ブラジル	サンパウロ大学文学部図書館 Teiiti Suzuki図書館 Biblioteca Teiiti Suzuki, Universidade de São Paulo
12	大上 順一 OUE, Junichi	イタリア	ナポリ大学「オリエンターレ」アジア研究科 Department of Asian Studies, University of Naples "L' Orientale"
13	大塚 靖代 OTSUKA, Yasuyo	英国	大英図書館アジア・太平洋及びアフリカコレクション 日本部 The British Library Asia, Pacific & Africa collections, Japanese Section
14	ランパート ハルトムート LAMPARTH, Hartmut	ドイツ	ボン大学日本学研究所 University of Bonn, Institute of Japanese Studies
15	ゴットハイナー GOTTHEINER, Klaus	ドイツ	トリーヤ大学図書館 Trier University Library
16	杉田 千里 SUGITA, Chisato	フランス	アジア交流推進研究所 Institut de Préparation à l'Asie-Pacifique
17	ドミトリー・ラゴージン RAGOZIN, Georgievich Dmitri	ロシア	ロシア科学アカデミー社会科学学術情報研究所 Institute for scientific information in social sciences (Russian Academy of Sciences)

* 平成16年度研修の概要については、北米日本研究資料調整協議会 (North American Coordinating Council on Japanese Library Resources, NCC) のウェブページ (<http://www.fas.harvard.edu/~ncc/JSIST2004/index.html>) に北米からの研修生による報告が英文で掲載されている。